

2007-IV-11

移住と「帰郷」
——離散民族と故地——

岡 奈津子 編

2008年3月

独立行政法人 日本貿易振興機構

アジア経済研究所

調査研究報告書

地域研究センター2007-IV-11

移住と「帰郷」——離散民族と故地

まえがき

本報告書は、日本貿易振興機構アジア経済研究所における2007年度研究会「移住と『帰郷』——離散民族と故地」の中間報告である。この研究会では、中央アジア・コーカサス地域研究およびソ連史の専門家が集い、「離散民族」をひとつのキーワードとして、民族の故地への「帰還」運動および国家と在外同胞との関係を、様々な視点から考察してきた。

本書の構成は以下のとおりである。まず第1章（岡奈津子）は、カザフスタンに「帰郷」するカザフ人移民を扱う。ソ連時代に基幹民族たるカザフ人が少数派に転落していたカザフスタンでは、1991年の独立後、政府がこの民族バランスを「是正」し、ソビエト政権の負の遺産を克服すべく、在外カザフ人の呼び寄せ政策を実施してきた。これに応じて周辺諸国から「祖国」を目指すカザフ人の移住は、まさに現在進行形の現象である。

続く第2章（半谷史郎）は、同じくカザフスタンを舞台としつつも、そこに安住の地を見いだせずドイツに「戻って」いく人々に焦点をあてる。独ソ戦勃発後に強制移住によってカザフスタンに連れてこられたドイツ人は、「よそ者」であっただけでなく「敵性民族」のレッテルにも苦しめられた。その彼らに自治領を与えようという計画は、カザフ人の抗議行動によって頓挫する。ここで詳細に分析されている「ツェリノグラード事件」（1979年）の背景にあるのは、この時代にカザフ人のあいだで高まりつつあった「自分の」共和国の領域に対する権利意識であり、その意味で第2章は第1章とコインの表裏をなしているといえよう。

第3章（吉村貴之）は、ユダヤ人とならんで「ディアスポラ」の代名詞とされる民族、アルメニア人を取りあげている。アルメニアはまた、ナゴルノ・カラバフの領有権をめぐるアゼルバイジャンとの紛争でも知られる。この章では、「帰国」したアルメニア人が本国におけるナショナリズムの高揚にどの

ような影響を及ぼしたのか、また紛争で疲弊したアルメニアの国家建設において、独立後の政権が在外同胞をいかに利用あるいは排除したのかが示されている。

本研究会ではこの中間報告を基に、最終報告（2009年度発表予定）に向けてさらに議論を重ねていきたいと考えている。関係諸氏のご指導・ご批判を仰ぐことができれば幸いである。

2008年3月

編者

目次

まえがき

目次

執筆者紹介

第1章 祖国を目指して——在外カザフ人のカザフスタンへの移住——
岡 奈津子 …………… 1

はじめに

第1節 先行研究

第2節 カザフ人の「帰還」

第3節 聞き取り調査—モンゴルとウズベキスタン出身者の事例

むすびにかえて

第2章 ツェリノグラード事件再考
半谷 史郎 …………… 19

はじめに

第1節 ツェリノグラード事件までの経緯

第2節 ツェリノグラード事件の背景

おわりに

補論 戦後ソ連社会でドイツ人アイデンティティを確立することの難しさ

第3章 アルメニア再独立期に見るアルメニア本国と在外社会との関係 ——ナゴルノ・カラバフ問題を手がかりに——	吉村 貴之 …………… 45
---	----------------

はじめに

第1節 ナゴルノ・カラバフ問題の背景

第2節 ナゴルノ・カラバフ問題の発生とアルメニア社会

第3節 独立後のアルメニアと在外同胞

まとめ

執筆者紹介

第1章 岡 奈津子（おか・なつこ）

アジア経済研究所 地域研究センター 研究員

第2章 半谷 史郎（はんや・しろう）

東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程修了 博士（学術）

第3章 吉村 貴之（よしむら・たかゆき）

東京大学 産学官連携研究員 東京外国語大学 非常勤講師